
女神の子は宇宙を抱きダンジョンで何を思うか
孤独ウサギ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁々小説投稿サイト」で掲載中の小説を「暁々小説投稿サイト」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁々小説投稿サイト」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の子は宇宙を抱きダンジョンで何を思うか

【作者名】

孤独ウサギ

【あらすじ】

どうもです。

色々なダンまちの二次創作見てきましたが、オリ神や、ロキ、ヘスティア・ファミリアに所属するのばかりで、フレイヤ・ファミリアに属するのが、無いなと思いました。

なので、私が作ってみようと思いました。

という事で、フレイヤ・ファミリアのオリ主二次創作物なので、十分注意してください。

設定

名前：ヴァン・ヴァナディース

二つ名：魔導機械（デウス・エクス・マキナ）、女神の愛子

所属：フレイヤ・ファミリア

人種：ヒューマン→デミ・ゴッズ

魂魄：満月が浮かび星々が輝く夜空を思わせる魂

容姿：綺麗な銀髪に、フレイヤと同じ紫の瞳の瞳をしたイケメン。

体格は平均よりの細身である。

性格：何事にも直ぐに興味を持ち、何かを作るのが好き。冗談をよく言い、揶揄うのが好き。天然に見えるが、その実、冷静な思考と判断を下す。趣味においては、かなり頑固な部分がある。

主武装：特殊武装・飛翔剣《オフスティアセイヴァー》、特殊武装

・自在槍《オフスティアウィング》、特殊武装・銃剣《オフスティアバスター》

予備武装：特殊武装オフスティアシリーズ（大剣・長槍・双小剣・

両剣・鋼拳・抜剣・長銃・大砲・双機銃・強弓・長杖・導具・棍棒

・魔装脚）…

スティタス：Lv7

基本アビリティ：筋力D耐久I敏捷A器用S魔力B

発展アビリティ：神秘C飛翔C鍛冶D製作D魔導E直感F

スキル：《舞闘乱武》《主神愛子》《純真万才》《即換武装》

魔法：「ヴィジョン・フレイヤ」

評価：捨てられていた赤ん坊をフレイヤが拾い、自身の子供として育てる。赤ん坊の頃にフレイヤの乳を飲み育ったせいか、ヒューマンではなく、デミ・ゴッズという種族になっている。その証として、

フレイヤと同じ髪、瞳、美貌を持つ。フレイヤから様々な事を学び、すくすくと成長し、何かを作る事に楽しさを覚える。大きくなると冒険者として登録し、ダンジョンに行く様になる。上級冒険者になってからは、制作専用の家を買取り、何かを作る時はそこで行う。現在はオラリア最強の一人として数えられ、またアスフィ・アル・アンドロメダと同じ神秘持ちの鍛冶師として有名だが、制作した武器は全て特殊すぎる為、使い手を選ぶ。近・中・遠距離の何処でも戦闘ができ、独特なアクロバティックの戦闘を行う。

フレイヤ・ファミリアは勿論、鍛冶関連でゴブニュ・ファミリアやヘファイトス・ファミリア、更に神秘持ちとしてアスフィ、それと酒場『豊穡の女主人』とも友好関係を持つ。

1話

ここはオラリア。

世界の中心であり、全ての人が夢見、目指す場所である。
ある者は言った。

『ここには全てがある』

そう、ここは理想の地。

夢、幻想、希望を追い求め、行き着く場所なのである。

しかし、世界とは何時だって表裏一体。

夢や希望があれば、悪や絶望もある。

混沌とかす闇の中を影に紛れ、今日も人々の喜びの裏で名の知れぬ
弱き他人が悲しみの声を叫ぶ。

そんなオラリアの道通りを一人の女性が歩いて行く。

その女性はただの女性では無い。

女神である。

比喩や過言でも無い。

まさに神という存在である。

ここオラリアには天界から降り立った神々が住んでいて、この世界
である下界の人々に神の恩恵を与え、ファミリアを作り、様々な事
で暇潰しをしているのである。

彼女もそんな神々の一人である。

フレイヤ

北欧神話に、出てくる女神の一柱であり、美、愛、豊饒、戦い、そして魔法と死を守護する太母である。

ここ、オラリアで絶世の美女として有名であり、多くの男神と自身のファミリアの者達等、多くの男性を性的に食い尽くしている事で神々の間では有名である。

更に、ゼウス、ヘラ・ファミリアを除けば一二を争う有力ファミリアでもある。

そんな彼女は普段はバベルの塔にいて、人々の魂を観察しているのだが、どうも今日は何か気になる事があるのか塔を出て歩いている。

（何かしら？この感覚は、誰かに何かをされた訳ではない。寧ろ私の直感が、私の本能がこの先にあるナニカに反応している…。まあ、良いわ？さて何があるのかしら）

少し歩いた所に、横の小道にポツンと置いてある籠を見つける。

フレイヤは自身が探していたのがこれだと判断する。

そして、驚く。

彼女は籠の中を覗くと、それと共に魂を除いてしまった。

そう、覗いてしまったのだ。

それは、広大な空、いや、空をも超えて、月が昇る夜空である。

まさにそれは、宇宙の縮図そのものである。

無限散りばめる輝く星々は、その存在を示すかの様に光を放つ。

無数の銀河が渦となり回り、恒星は煌めきながら爆発を繰り返し、光の闇の疾走が永遠と続いていた。

それは、未知なる神秘の世界であり、美の女神をも魅了させた。

そして、現実に戻る。

フレイヤは驚いた。

籠の中を見れば、そこには可愛らしい小さな赤子が、スヤスヤと寝ていたからだ。

今見たあの世界こそが、この目も開いてない赤子の魂なのだから。

（人の身でありながら、魂が世界そのものとなっている？一体、この子は…）

フレイヤは恐る恐る赤子を抱き抱える。

すると、赤子は花が咲いたかのように、ニパーとフレイヤに笑いかける。

フレイヤは思った。

（…今日からこの子は私の子。誰の子でも無い、私の子。…この子を捨てたのか、それとも意図してでは無いのか、何方にせよ感謝するわ。この子に出会えた事を。…フッフ）

フレイヤはバベルの塔への道を歩き、赤子を抱きながら、笑いかける。

それに赤子も応えるかの様に、キャツキャツと笑う。

フレイヤは自身は気付いてないが、口元はニヤけており、もうデレデレである。

その様は、艶かしく、妖艶であり、見たものがいれば、その魅力の神威で、神であろうと腰を砕かせる程である。

「フレイヤ様、お帰りなさいませ」

「あら、オツタル。ただいま」

「…差し出がましい様ですが、フレイヤ様。その赤子は…」

「…まあ、良いわ。今は気分が良いから、その無礼も許しましょう。
この子は、私の子よ」

「…!!?!?!?!」

2話

「マーマ、マーマ」

「はい、はい。ご飯の時間よ」

フレイヤは衣服の一部をはだけさせ、豊満で魅惑的な胸を曝け出す。赤子は手を必死に伸ばし、片方を掴み、ゴクゴクの乳を飲んでいく。その光景は、まるで聖母が神の子に慈しみ、乳を与える所を、有名な芸術家が絵画にしたかの様に、意識が吸い込まれ、何物にも冒しがたい神聖なモノを感じさせる。

それをまさに、オツタルを含めるフレイヤ・ファミリアの者達は、目の前にして、それを感じさせた。

フレイヤが赤子を見つけて、幾月が経った。

最初の頃は、我らが主神が赤子を自身の子にすると言われ驚愕し、赤子の癖に我らが主神の窮愛を受ける事を羨ましく思う嫉妬が入り混じった複雑な気持ちをも眷属は抱いていた。

しかし、その赤子の魅力か、フレイヤの怒りを怖れてか、赤子がフレイヤと同じ銀髪と紫の瞳をしているからか、次第に認め始めていった。

そんな赤子の名前はヴァン・ヴァナディース。

フレイヤの古き二つ名と族名であり、私の子という意味を込めて授けた。

「…フッフ、貴方達、何か聞きたい顔をしてるわね」

「…フレイヤ様、不躑ながら質問をしてもよろしいでしょうか？」

「どうしたのかしら？オツタル」

「フレイヤ様のお子様は、当初は白髪でした。その頃はまだ、目が開いていませんでしたので、瞳については偶然の可能性も否認ませんが、それにしても…」

フレイヤは笑う。

妖艶に、小さく、それでいてそこにいる全てに響く微笑みを。

「それはね。この子が進化したのよ」

「進化、ですか」

「そうよ。私も最初は驚いたわ。私という神の存在により授けられる乳、そしてそれを受け入れる程の広大な魂の器、それらの要因が、この子をヒューマンという人族から進化させたのよ。既にこの子は人族ではなく、かといって神の存在でも無い、精霊に近い存在。名付けるならば、デミ・ゴッズと言う所かしら」

眷属達は息を呑む。

そして、納得した。

何故、主神の愛に狂った我等がこの赤子を認めたのか、何故、我等の中から嫉妬の心が消えたのか、今まさに理解したのだ。

ヴァン・ヴァナディースは、フレイヤに最も近い存在なのだ。

「ンクッ、ンクッ…プハッ」

「あら、もうお腹一杯？はい、嘔気しましょうね。トントントン」

赤子はフレイヤに優しく背中を叩かれ、ケフツと嘔気をする。

そして、お腹一杯になり、フレイヤの腕の中でスヤスヤと眠る。

フレイヤは軽く揺すりながら、ヴァンを揺籠に寝かせる。

「フレイヤ様、あの子に神の血は与えるのですか？」

「そうね、アレン。この子がもう少し、大きくなった時に与えようかしら」

フレイヤは外を眺めて、惚ける様に溜息を出す。

「その時が、楽しみね」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~15486

女神の子は宇宙を抱きダンジョンで何を思うか
2016年01月07日 15時40分発行